＜研究ノート＞

羞恥心に関する研究動向と学校教育場面における今後の展望

鈴　木　千　裕*
庄　司　一　子**

問題と目的

羞恥心という感情は誰もがしばしば感じるものである。日常的な場面で例を挙げると，何もないところで躓いて転んでしまったときや友人だと思って声をかけてしまったが別人だったときがある。また幼少期の記憶をたどれば，学校で先生のことを「お母さん」と呼んでしまったときや，大勢の前で，一人で歌を歌わなければならない音楽の授業などがある。この他にも意識の有無にかかわらず多くの場面で羞恥心という感情は私たちの心に湧き上がる。そして思い起こされる多くの場面は，自分の失敗が大勢の目の前に表出してしまうときなど，ネガティブな印象と結びついていることが多い。

このように羞恥心は非常に身近な存在であるが，その機能や影響に意識的であることは少ない。羞恥心は近年注目が集まる自己意識的感情に含まれ，この領域における重要な研究テーマの１つである。樋口(2000)によれば，羞恥心とは「無意図的なあるいは自らの望まない苦境や逸脱を意識した際の情緒的な反応」（樋口，2000）である。羞恥心・恥は不適応的機能を持つとする知見が提起され（e.g.，Tangney，1993；有光，2001），子どもの精神的健康の維持という視点からも非常に興味深いテーマであると考えられる。

そこで，本論では，羞恥心・恥に関する定義，発達，測定，羞恥心・恥のもたらす問題についての先行研究を概観し，学校教育場面における今後の研究の方向性について検討する。

*　筑波大学人間総合科学学術院博士前期課程
** 筑波大学人間系

羞恥心に関する基礎的情報

1　羞恥心の定義

この節では，羞恥心の定義を整理する。ただし，「羞恥心」に限らず，感情は単純で一様な感情状態ではなく，境界があいまいであることは多くの先行研究で言及されている(e.g.，成田，1990；菅原，1998；小川，2015)。「羞恥心」に該当すると考えられる状態を指し示す用語は多様であり，本邦においては，「恥」(e.g.，久崎，2010）や「羞恥感情」(e.g.，成田・寺崎・新浜，1990)，「対人不安」(e.g.，菅原，1998）等，国外に目を向ければ，「shame」（e.g.，Tangney，1989)，「embarrassment」(e.g.，Miller，1996)等があり，その訳し方や使い方も様々である。そこで，本稿においては，それぞれの言葉の意味･定義･用いられている文脈を確認した上で，改めて「羞恥心」とは何か検討し，定義することとする。

まず，本邦における「羞恥心」研究において用いられる用語を取り上げる。上述のように，本邦における研究では「恥」「羞恥感情」「対人不安」といった言葉が用いられる。

菅原(1991)は，「羞恥」を対人不安の１つのカテゴリーとして位置づけ，その状態を表現する語彙を分類することで，「羞恥」という概念の守備範囲の明確化を試みた。学生を対象に調査を行い，人前で不安を感じた体験を集めて因子分析の手法で分類をしたところ，対人不安感を表現する24種類の言葉が４つのグループに分けられた。対人不安は「ハジ（社会的に受け入れら

れない自己像が露呈した状況)」「テレ（他者にとってなじみのない自己像が露呈した状況)」という何らかの事件や出来事がすでに起きてしまった後に感じる 2 つのグループと，「対人緊張（人前での自分に自信が持てない状況)」「対人困惑（対人場面において自己の役割が混乱した状況)」という現在進行形の場面で感じる 2 つのグループの，計 4 グループに分類され，菅原(1991)は前者の 2 つを「羞恥の意識」として定義した。すなわち，菅原(1991)によれば，「羞恥の意識」は，何らかの行動・事件・出来事の後に生じる「テレ」や「ハジ」の感情である。

他方，菅原(1991)では羞恥心の下位カテゴリーとして定義された「ハジ」，つまり「恥」も，「羞恥心」を指し示す用語として多くの研究で用いられている。樋口(2000)は，「恥」の概念を「照れ」や「困惑」といった感情を含む包括的な感情として定義し，恥が発生する状況を整理した。樋口(2000)は，菅原(1991)が示した 4 つの対人不安の発生状況をすべて恥の発生状況と捉えなおした上で，自らの行為について反省する私恥状況と，性に関する情報が存在する性的状況の 2 つの状況カテゴリーを加え，合計 6 つの状況カテゴリーを設定した。また，樋口(2002)によると，報告頻度が高いという意味で，菅原(1991)の言う「ハジ」，樋口(2000)による分類では「公恥状況」とされる状況カテゴリーと「私恥状況」の 2 つの状況は典型的な恥発生状況とされ，その他の 4 つの状況カテゴリーは非典型状況とされる。また，樋口(2002)は，典型状況が「すでにネガティブなことをしてしまった状況」であり，「情けない」といった「自己否定感」との関連が強い(樋口，2000)一方，非典型状況は「必ずしもネガティブであるとは言えない状況」であり，「自己否定感」との関連がない(樋口，2000)ことを指摘している。

次に，自己意識的感情研究の一部としての「恥」に関する研究を概観する。「恥」は，一般に自己意識的感情の 1 つとして認められている。自己意識的感情とは，「他者からの評価を意識したり，他者と自分を比較するなど，自己意識が関わり経験される感情」（有光，2015）であり，Fischer & Tangney(1995)の出版以降一般的になった概念である。

Tangney の一連の研究では，後述する自己意識的感情尺度 TOSCA(The test of Self-conscious Affect)の作成(Tangney, 1989, 2002）や，恥（shame）と罪悪感（guilt）の差異の検討がなされ（e.g., Tangney, 1995)，本邦においても文化差を考慮した上で追随する研究が多くなされている（e.g., 菊池，2003; 有光，2001)。Tangney は一連の研究の中で，それまで同一視されていた恥と罪悪感を区別している。故に，罪悪感との比較の上で恥の定義がなされている。Tangney(1991)は，恥と罪悪感を区別する上で Lewis(1971)にならい「自己」に着目し，罪悪感を特定の行動に対する否定的な評価に伴う感情とした上で，恥を自己全体に対する否定的な評価に伴う感情と定義した。

また，久崎(2002)は Lewis や Tangney の流れを汲みながら，恥・罪悪感の違いを，それぞれの発動に際する認知的評価及び，3 つの反応要素（主観的経験，神経生理学的変化，表出・行動）という側面に見出し，それぞれに関して先行の知見を参照し，定義づけを試みた。情動の反応三要素の連関構造が明らかではないものの，恥は「ある種の失敗を自己の安定した側面に帰属することによって発動し，強烈な苦痛，身体が重いあるいは縮小する，隠れたいといった主観的経験的側面，心拍の減少といった神経生理学的側面，他者の視線を免れるような表出・行動的側面の 3 つの要素が絡み合って生じるプロセス」と定義した。

しかし，自己意識的感情としての「恥」を研究する際は，その言葉の適応範囲を確認する必要がある。「羞恥心」と同様に，一般に用いられる「恥」という言葉も非常に多様な感情や状況を含む。上記のような非常に強いネガティブな感情としての「恥」を研究する際は，研究対象とする感情が本当にこの「恥」に含まれるのか，という確認を行わなければならない。

次に，国外における「羞恥心」を指し示す用語を整理する。先述の通り，国外での研究においては，「羞恥」状態に該当する用語として

「shame」「embarrassment」が代表的なものとして挙げられる。他にも「shyness」「audience anxiety」「social anxiety」等も取り上げられるが，大別すると上記の 2 つに絞られる。「shame」と「embarrassment」，双方とも「無意図的な，あるいは自らの望まない苦境や逸脱を意識した際の反応」(Edelmann, 1985) と定義することもあり，非常に類似した感情としてみなされることも多いが，Buss(1980)は前者を道徳的な意味合いを含む強い感情，後者を比較的弱い感情で，日常でしばしば感じるものと定義した。一方で，樋口(2009)は「shame」は日本語における羞恥の概念のうち「照れ」や「困惑」的なものを含まず限定的であり,「embarrassment」は「照れ」や「自己嫌悪」といった包括的なものとして整理している。

このように,「shame」と「embarrassment」は厳密に区別されておらず，それ故，本邦における「羞恥心」研究において，日本語と英語の組み合わせが複数存在するようになっている。

ここまで,「羞恥心」を表現する様々な用語を用いた研究を概観してきたが，いずれも羞恥心の意味を的確に説明しているとは言い難い。「羞恥心」は感情を指し示す用語であるため，ここまで概観してきた「羞恥心」の発生する状況やプロセスは，その定義を理解する一助にはなるが,それ自体とは言えない。また,菅原(1991)，樋口(2000, 2002)が見てきたように,「羞恥心」を経験する状況は非常に多様であり,一言に「羞恥心」と述べてもその具体的な感情は様々である。そこで，本稿では「羞恥心」を，羞恥心を説明する下位感情の総体として定義し，その意味は「無意図的なあるいは自らの望まない苦境や逸脱を意識した際の情緒的な反応」(樋口，2000) とする。下位感情としては，樋口(2000)が分類した「混乱的恐怖」「自己否定感」「基本的恥」「自責的委縮感」「いたたまれなさ」「はにかみ・もどかしさ」とする。

2　羞恥心の発生する状況

次に，羞恥心の発生する状況に関する先行研究を整理する。

まず，羞恥心が発生する状況に関して統計的な分析を行った研究として，橋本・清水(1981)がある。橋本・清水(1981)は羞恥心を経験する状況を大量に収集し，その中から 100 項目を抽出し，羞恥心の強さの評定値を基に因子分析を起こった。その結果「性」「かっこ悪さ」「注視」「家族」「異性」「無様な行為」「思い違い」「きまり悪さ」「知識・能力露見」「自己不全感」「不適当」「(解釈不能)」の 12 のカテゴリーに分類された。

他に，羞恥心が発生する状況に関する代表的な研究に成田・寺崎・新浜(1990)がある。成田他(1990)は，羞恥心の定義が非常にあいまいなものであることを前提に，一様ではない感情状態の差異を場面状況という概念から見出そうとした。大学生と女子看護学校生の計 171 名を対象に，自分が羞恥心を経験した具体的状況に関する自由記述のデータを大量に収集し，羞恥心を引き起こす状況を分類した。総計 2070 例にのぼる状況を，ある状況において羞恥心を経験した個人の行動に着目して分類した Sattler(1965)，および Sattler に準じた橋本(1980)の方法に従い，39 のカテゴリーに分類した。 この 39 の状況カテゴリーの中から 120 項目からなる質問紙,「状況別羞恥感情質問紙」を作成した。この質問紙は，大学生 264 名を対象に実施され，恥ずかしさの度合いを「まったく恥ずかしくない(1)」から「非常に恥ずかしい(4)」の 4 件法で評定を求めた。調査の結果，得られたデータを因子分析にかけたところ 4 つの状況カテゴリーに分類された。1 つ目は,「みっともない髪形や服装をしているとき」などに代表される，自分の劣位性が公衆の面前で露呈した「かっこ悪さ」の状況である。2 つ目は,「気恥ずかしさ」のカテゴリーとされ，対人接触状況の例が多く含まれるが，状況そのものは多岐にわたる。異性との相互作用や，肯定的否定的問わず他者の視線が自分に集まるときなどの「はにかみ，緊張，照れ」的羞恥，未知の人との相互作用時に経験する「気まずさ」のような「困惑」的羞恥が含まれる。3 つ目は,「自己不全感」と命名され，他者の存在は比較的無関係に，理想的自己像に至らない自分を恥じる羞恥

であると言える。4つ目は,「性」のカテゴリーであり,「ヌードやポルノシーンのポスターを見た時」といった性的な状況が該当する。以上から，成田他(1990)はさらなる下位カテゴリーの存在を示唆しながらも，羞恥心を経験する状況を「かっこ悪さ」「気恥ずかしさ」「自己不全感」「性」の4つに分類したと言える。

また,菅原(1991)の研究も同様の試みを行い,「羞恥心」を「羞恥の意識」に含まれる「ハジ（社会的に受け入れられない自己像が露呈した状況)」「テレ（他者にとってなじみのない自己像が露呈した状況)」,「コミュニケーション不安」に含まれる「対人緊張（人前での自分に自信が持てない状況)」「対人困惑（対人場面において自己の役割が混乱した状況)」の4つに分類した。

樋口(2000)は，羞恥心の下位感情に着目し，大学生309名を対象に羞恥心発生時に感じられる個々の情緒を測定し，6つの羞恥心の情緒群「混乱的恐怖」「自己否定感」「基本的恥」「自責的委縮感」「いたたまれなさ」「はにかみ・もどかしさ」に分類した。その上で，大学生161名を対象に，先行研究の状況カテゴリーを基に分類した6つの状況カテゴリー「私恥状況」「公恥状況」「照れ状況」「対人緊張状況」「対人困惑状況」「性的状況」との関連を調査した。その結果，すでにネガティブな行為が行われた「私恥状況」「公恥状況」では，情けないといった「自己否定感」との関連が強いが，その他の必ずしもネガティブな行為が行われていない状況では「自己否定感」がほとんど感じられないことが明らかになった。

また，先述の通り，樋口(2002)は6つの状況カテゴリーを，経験の頻度の高さという意味で典型的な状況である「私恥状況」「公恥状況」と，非典型的な状況である「照れ状況」「対人緊張状況」「対人困惑状況」「性的状況」の2つに分類し，それぞれ前者を「典型状況」，後者を「非典型状況」とした。樋口(2000)の知見と合わせると,「典型状況」はすでにネガティブな行為が行われており,「自己否定感」との関連が強いが,「非典型状況」では「自己否定感」がほとんど感じられない，ということが言える。

以上の羞恥心を経験する状況に関して調査した研究をまとめたものがTable1となる。成田他(1991)において示唆された,「気恥ずかしさ」の下位カテゴリーが他の研究で言及されている。これらの研究から，羞恥心を経験する状況が多様であり，その下位感情もまた多様であることが明らかにされてきたと言える。

3　羞恥心の発生要因

羞恥心の発生要因は主に認知的な側面から議論をされている。

既に定義の項で述べたように，Tangney の一連の研究では，罪悪感を特定の行動に対する否定的な評価に伴う感情とした上で，恥を自己全体に対する否定的な評価に伴う感情と定義した。恥は本人の注意が全体的自己にあてられたときに感じられ，そのため不適応的な自己機能を導きやすいとした。

また，Tracy & Robins(2004)は，Tangney の恥は自己,罪悪感は行為への焦点という区別を,変化させることの難しい自己全体的帰属か，変化可能な自己の特定の側面への帰属の違いであ

Table1　恥に関する発生状況の分類（樋口, 2009に加筆）

研究者	分析の方法	恥の発生状況の類型					
橋本・清水(1981)	因子分析	自己不全感	かっこ悪さ、無様な行為、知識能力露見	異性	注視	きまり悪さ、家族、思い違い不適当	性
成田他(1990)	因子分析	自己不全感	かっこ悪さ	気恥ずかしさ			性
菅原(1991)	クラスター分析		恥の意識		コミュニケーション不安		
			Ⅰ：ハジ	Ⅱ：テレ	Ⅲ：対人緊張	Ⅳ：対人困惑	
樋口(2000)	先行研究の再構築	私恥状況	公恥状況	照れ状況	対人緊張状況	対人困惑状況	性的状況

ると示唆した。この仮説は Tracy & Robins(2006)によって検証された。上記の仮説が正しいと考えられることに加え，恥を経験する傾向，すなわち特性としての恥は評価の外部への帰属と正の関係があることが示された。

一方，羞恥心はなぜ発生するかについて，樋口(2001)は先行研究における恥の発生因モデルを5つに分類した（e.g.，Modigliani，1971)。1つ目はModigliani(1971)の「自尊心低減モデル」で，羞恥心は他者からの否定的評価とそれに伴う自尊心の低減によってもたらされる。2つ目は「社会的評価モデル」(e.g.，Miller，1996)で,羞恥心の発生因は社会的評価への懸念とされる。3つ目の「個人的規範モデル」(e.g.，Babcock，1988）では，自らの行動が自己概念から逸脱することによって羞恥心が生じると説明した。4 つ目の「相互作用混乱モデル」(e.g.，Silver et al，1987)では，社会的場面における個人の役割の混乱から対人相互作用が停滞することによって羞恥心が発生するとした。最後に5 つ目は,「期待裏切りモデル」(e.g.，菅原，1992)では,羞恥心は他者からの期待を裏切る自己像の提示や，提示の予測によってもたらされる，他者からの否定的評価の予測によって発生するとされた。樋口(2001)は，この5つの恥の発生因モデルを項目化し，先述の「私恥状況」「公恥状況」から場面を提示し，これらの場面で感じる羞恥心について各項目の当てはまりの程度を調査した。因子分析の結果，羞恥心の認知的な発生因は「社会的評価懸念」「自己イメージ不一致」「相互作用混乱」「自尊心低減」の 4つに分類された。また，Higuchi & Fukada(2002，2008)は，これらの認知的発生因が，先述の 6つの状況カテゴリー「私恥状況」「公恥状況」「照れ状況」「対人緊張状況」「対人困惑状況」「性的状況」にどれほど当てはまるか調査した。調査の結果，状況に応じて異なる発生因が働いて恥を発生させているという示唆が得られた。例えば,「照れ状況」や「性的状況」といった場面では自尊心の低減はほとんど関連しないが,「私恥状況」では強く意識される。また,「公恥状況」では「相互作用混乱」が最も強い要因として挙げられた。

また，発生因が認知的な側面ではなく，環境的な要因に帰属するとする考え方も存在する。菅原(2005)は，羞恥心の発生する状況を，①自分の言動・思考に対して羞恥心が発生する場合と，②自分が褒められた時に発生する場合，③傍観者であるときに発生する場合，の3つに分け，特に①の場面において羞恥心の発生する要因を次のように説明した。第一に，問題行動をしても，他者がいなければ恥ずかしくない（他者の目の有無)。第二に，他者がいても，問題行動がばれなければ恥ずかしくない（行為の露見の有無)。第三に，気の迷いなら恥ずかしくない（行為の人格・能力への帰属の有無)。第四に，目撃者が無関係の人，今後関係のない人なら恥ずかしくない（目撃者との関係性の有無)。この特に第四に関しては，行為を行った自己と他者との関係性・親密度に注目した捉え方である。

以上のことを整理すると，羞恥心の認知的な発生因は「社会的評価懸念」「自己イメージ不一致」「相互作用混乱」「自尊心低減」に大別され，いずれにおいても，出来事に対する認知的評価の中で最終的に自己への帰属によって生起すると言える。ただし，羞恥心が経験されるか否かはその状況や感情状態，他者の存在や他者との関係性など，さまざまな要因によって規定される。樋口(2009)は，この知見を，羞恥心が発生しないように抑制を試みるといった応用研究において非常に重要になると指摘している。抑制すべき羞恥心がどのような状況で発生し，どのような種類の感情なのかを考慮することが必要であるからである。

4　羞恥心と文化

羞恥心の研究をするにあたり，文化差に触れないわけにはいかない。

Benedict(1946)が著書『菊と刀』で，日本を「恥の文化」と指摘したことは，研究者のみならず非常に多くの人に認識されている。以降，日本人は欧米諸国の人々と比べ，非常に恥を感じやすいという考え方が一般であったと言える。しかし，この考えはBenedict(1946)の考えを正確に捉えているとは言い難い。Benedict(1946,

長谷川訳，1967)は，「真の罪の文化が内面的な罪の自覚にもとづいて善行を行うのに対して，真の恥の文化は外面的強制力にもとづいて善行を行う」としている。これは恥の感じやすさを述べたものではなく，道徳の基本体型の原動力の違いを指摘したものである。菅原(1998)は，羞恥心が人類共通の感情であり，羞恥心が個人の行動を縛ることは普遍的な事実であることを指摘している。

その一方で，人類に普遍的な感情でありながらも，羞恥心を経験する場面の多様性に文化差が存在する可能性も示唆されている。詳しくは後述するが，菊池(2003)や有光(2001)は，Tangney の作成した TOSCA の妥当性を検討する際に，文化や社会の条件によって提示されたシナリオに対する感情が異なることを指摘し，日本版の自己意識的感情尺度の開発を試みている。また，菅原(2005)は，当時社会問題とされていた若者の“恥知らず”な行動は，彼らが恥じらう心を失ったが故に発生したものではなく，その行為自体が恥ずかしがるような行為ではないと認識されているからこそ起こったものであると指摘した。この指摘を踏まえれば，何が恥ずかしいのか，という共通観念はそのコミュニティーや環境・文化によって規定され，それ故国内外で羞恥心に文化差が生じることも考えられる。それ故，羞恥心の研究をする際には，調査対象が何を恥ずかしいと感じるかのみならず，そもそもその行為を恥ずかしいと感じるべき行為として認識しているか，ということも考察に含む必要がある。

羞恥心の発達

ここでは，羞恥心の発達に関する理論を整理する。

羞恥心が出来事に対する認知的評価の中で最終的に自己への帰属によって生起することを踏まえ，自己意識の成立を経て羞恥心も出現し始めると考えられている。

Lewis(1992，髙橋他訳，1997)は自己意識の成立を 1 歳半頃とみなし，それに伴い自己と他者の反応のつながりや関係に対する「後方視的観察」が可能になるという。そして，それを通じて社会的基準や目的を取り入れ，それにも続く自己評価が 2 歳半過ぎに可能になり，羞恥心や罪悪感，誇りといった感情が発現する。

3 歳頃以降になると，加速度的な言語の発達に伴い感情に関する語彙が増え，また感情的な出来事に関する親子の会話も増加する(Lagattuta & Wellman，2002)。これらの語彙や会話の向上から，感情の原因と結果の関係の理解やルール・基準に関する知識の発達が進み，対人関係の広がりとともに拡大し，自己概念やアイデンティティに組み込まれる。

就学以降は，家族以外の他者との社会的活動の中で，自分の高い評価を求め，自分自身のスキルや人格などを比較するようになる。また，他者が自分の行動選択やパフォーマンスをどう評価するかを予測するようになり(Harter，2006)，子どもの恥などの自己意識的感情の知識を発達させる。7 歳を過ぎるようになると，自分の行動に対するネガティブな評価のみに羞恥心を感じるのではなく，他者の行動による自己へのネガティブな評価にも羞恥心を感じるようになる。

本邦においても，佐藤(1979)が児童期における羞恥心の発達を研究している。佐藤(1979)は小学校 2 年生から 6 年生までの児童 192 名に対し，羞恥心を感じる状況 76 項目からなる質問紙，および自由記述による調査を行い，その変化の過程を調べた。調査の結果，それぞれの学年において異なる特徴が見出された。

小学校 2 年生は「他律道徳形成期的羞恥感情表出期」とされ，他者から与えられた道徳規範や常識脱する行動や稀にみる行動に対して，対処の未熟さや未経験ゆえに羞恥心を覚える。羞恥心が行動を左右したり，人格形成に強い影響をあたえたりすることはなく，「幼ない羞恥感情」とされる。

小学 3 年生は「他律道徳定着期的羞恥感情表出期」とされ，他律的であることは変化しないが，ある程度自分の意思や好み・習慣に基づいて羞恥感情を表出する。他者に提示される道徳

の内容や規範の意味を理解し，児童なりに意味づけて羞恥感情表出の基準としている。

小学4年生は「自己概念形成期的羞恥感情表出期」とされ，急に自己概念が形成される。4年生になると急激に羞恥感情を表出する状況が増える。ただし，この自己概念は現実自己とは一致しない，他律的な“良い子“に基づいた自己像である。3 年生までとは質的に異なる羞恥感情であり，理想的な自己像とそぐわない場合や，核となる自己像が見出せない場合に感情表出が急増する。

小学5年生は「仲間対比的羞恥感情表出期」とされ，4 年生時に他律的に形成された自己概念が仲間との対比によって変質し，場合によっては仲間が優先される。仲間とは異なり自分だけという状況で表出される羞恥感情はこの時期に最も頻繁であった。

小学6年生は「統合的羞恥感情表出期」とされ，高学年になって形成・変質した自己概念が統合され，確たる核として位置づけられる。他者と自己の統合によって形作られた自己像は，非常に的確に羞恥感情を表出する，とされる。

以上から佐藤(1979)の児童期の羞恥心の発達において，羞恥心は，自己意識の形成を経て出現を始める。幼児期は家族とのコミュニケーションの中で道徳規範や社会的規範を学び，自己概念やアイデンティティを確立していく。就学以降は，家族以外の他者との関係が始まり，当初は他者から提示された道徳規範にそって表出していた羞恥心が，自己概念の形成をきっかけに徐々に仲間関係を意識，場合によっては優先させて，表出されるようになる。6 年生になると児童期の羞恥心は完成形を迎え他律的ではない自己概念を基に感情を表出するようになる。

羞恥心の問題

1　羞恥心への対処

ここでは，生じた羞恥心に対して人はどのように対処するのかについて先行研究をまとめた樋口(2004)の論文を紹介する。

羞恥心の研究では長らくその状況の分類や，プロセスに焦点が当たっていたが，樋口(2004)は，人が羞恥心を感じた時に行う対処行動に関する研究を整理した。樋口(2004)は，まず，羞恥心の対処行動を 11 種に分類した（Table2)。328 名の大学生を対象に，羞恥心の発生因，羞恥心の下位感情と対処行動との関連を調べたところ，これらはほとんど関係がないという結果が出た。一方で，「公恥状況」「私恥状況」という二種類で検証した羞恥心の発生状況との関係では対処行動に違いが見られた。「公恥状況」では，「笑ってごまかす」や「沈黙する」といった客観的行動が多く見られたのに対して，「私恥状況」では羞恥心を軽減するための謝罪が多く見られた。また，「公恥状況」においてのみ，無視行動がとられていた。以上のことから，樋口(2009)は恥を発生させる状況は対処行動を規定する重要な規定要因であるとしつつ，羞恥心の対処が行われるメカニズムや，対処行動の効果が十分に検討されていないことを指摘し，羞恥心の最も明らかにされていない領域であるとした。

2　精神的健康への影響

羞恥心の中でも，「恥」は「自己不全感」や，自尊心の低減といったネガティブな要素と密接に関わることを示してきた。ここでは，そのような羞恥心が精神的健康にどのような影響を与えているか検討した先行研究を整理する。

Tangney(1993)は，恥と罪悪感の苦痛の程度やそれらが生じた際の感覚について調査を行い，Lewis(1973)による，恥は罪悪感より苦痛な感情であるという知見を実証した。このTangney(1993)の「恥は不適応的で，罪悪感は適応的である」という考えは本邦においても研究された。有光(2001)は Tangney の知見を基に，大学生を対象に調査を行い，罪悪感特性が人々の社会的活動を適応的な方向に促進する一方，恥の感じやすさを示す恥特性は男女ともに自己評価の低下を招き，統制不能感から不安感を喚起するため，社会的活動が抑制されやすいという知見が本邦において成立することを示した。

3　羞恥心による行動の阻害

主に公恥状況に研究の焦点を当てている菅原

(2005)は，他者からの一時的な評価の低下を回避するために羞恥心が発生した結果，長期的に見て本来必要な行動が阻止されてしまうことが起こりうることを指摘し，その状態を「恥の壁」と述べた。また，周囲の目を恐れて行動が阻止されてしまうことや，本当はその場にいる全員が指摘するべき事項であるのに,「自分だけその意見を持っていたらどうしよう」という不安に襲われて,結果誰も発言できないことのように,羞恥心が起こったが故に行動が阻害されるケースが多々あることを示唆した。

羞恥心の測定

では，羞恥心の測定はどのように行われてきたのか。ここでは羞恥心の測定尺度について整理する。

まずは，本邦における羞恥心の測定において頻繁に用いられる尺度として成田他(1990)の状況別羞恥感情尺度（Situational Shyness Questionnaire: SSQ）が挙げられる。この尺度は，既に述べたように，4 因子 120 項目の羞恥心を引き起こす状況を提示し,「まったく恥ずかしくない(1)」から「非常に恥ずかしい(4)」までの 4 件法で回答を求めるものである。成田(1993)によって信頼性と妥当性が検証されており，その他の恥尺度の妥当性を確認する際にも用いられる信頼性の高い尺度である。

成田他(1990)が羞恥心を感じるか否かに焦点を当てたのに対して，樋口(2000)の状態羞恥感情測定尺度は，どのような羞恥心が発生したかに焦点を当てた尺度である。対象者に過去の羞恥体験を 1 つ事由に想起，記述させ，その体験において羞恥心を表現する6下位因子23項目の各情緒をどの程度感じたか,「感じない」を 1,「非常に感じる」を 4 として 4 段階で評定させ

Table2　恥への対処行動の一覧（樋口, 2004; 川崎, 2008を参考に作成）

川崎(2008)による分類	対処行動の名称	内容
第1因子 防衛的対処	弁解	自分の責任を否定する言語的行動 例：自分が感じていることを口に出す
	攻撃	言語的・物理的に他者を攻撃する行為 例：相手や周りの人に対して攻撃する
	逃走	その場面からの物理的な移動 例：その場を離れる
	無視	恥ずかしさを引き起こした行為や自体をそのまま放置 例：なにごともなかったかのようにふるまう
	正当化	自分の責任は認めるが、それが必ずしも悪いことではないと主張する言語的行動 例：「まずいことは何もない」と主張する
第2因子 受容的対処	事実の報告	起こった事実の単純な報告 例：起こったことをそのまま口に出す
	内的状況の報告	個人の情緒的・心理的な内的状態の報告 例：自分が感じていることを口に出す
	ユーモア	ジョークやユーモアを用いる行為 例：ジョークを言って笑いをとる
	謝罪	自分の非を素直に受容する言語的行動 例：「すいませんでした」と謝る
	修復	恥ずかしさが生じる以前の状態に、事態を復元しようとする行為 例：恥ずかしさを引き起こした原因を取り除く
その他	客観的行動	笑い・微笑・沈黙・絶叫等の客観的行動 例：笑ってごまかす

る。樋口(2000)は同時にこの尺度の内容的妥当性，因子ごとの再検査信頼性，クロンバックのα係数を検討・算出している。

最後に，欧米の恥に関する研究で用いられるTOSCA と，それに基づいて作成された自己意識的感情尺度（菊池・有光，2006）を紹介する。TOSCA は，Tangney & Dearing(2002)が作成した自己意識的感情を測定する尺度である。成人版である TOSCA-3，青年版の TOSCA-A，児童版のTOSCA-C が存在し，いずれも提示されたシナリオに対して自己意識的感情をどれほど感じるかを5件法で回答するものである。

TOSCA-A は，回答を求める感情として，恥・罪悪感の他に誇り，無関心・外在化を加え，15個のシナリオに対して5つの感情の感じやすさを訪ねる計75項目の尺度となっている。日本語版は水野(1998)等によって作成され，岡田(2003)の報告では，α係数の算出，Big Five 性格検査，YG 性格検査等との関連の検討で妥当性が示されている。

TOSCA-3(Tangney, Dearing, Wagner, & Gramzow, 2000)は，11の否定的シナリオと5の肯定的シナリオからなる版と，否定的シナリオのみの短縮版があり，回答を求める自己意識的感情は恥・罪悪感の他に無関心と責任逃れがある。短縮版の日本語版に関しては菊池(2003)が妥当性を検討しており，それ以前の先行研究で示された，恥と罪悪感とがごく近い感情であること，恥は向社会的行動とは結び付かないが罪悪感は結びつくことの2つの知見と矛盾しない結果が得られたとしている。一方で，懸念点として，感情や行動がシナリオの示す状況によってかなり左右され一貫性がないことや，この種の感情が文化や社会の条件によって違ったものになると予想され，それを感じられる場面もこうした条件に大きく影響を受けることが挙げられた。これらの懸念点に対して，菊池・有光(2006)は，日本語版 TOSCA とも呼べる，自己意識的感情尺度を作成した。

菊池・有光(2006)の自己意識的感情尺度は，TOSCA 同様シナリオ形式の尺度である。12場面のシナリオに対して，「恥」「罪悪感」「対人的負債感」「個人的苦痛」「役割取得」「共感的配慮」の6つの自己意識的感情を経験するか5件法で回答を求める。再テスト信頼性や6尺度別のα係数が検討され，安定性や内部一貫性が認められている。

一方，TOSCA に代表される自己意識的感情尺度を羞恥心の尺度として採用する際には注意が必要である。有光(2001)など，多くの先行研究で恥と罪悪感の下位因子間に有意な正の相関が認められており，相互の影響を排除するために，分析の際はそれぞれの影響を統制した偏相関係数を算出するなどの作業が必要になる。

教育場面における羞恥心

ここまで羞恥心の定義や要因，状況といった理論的な側面に関する先行研究をまとめてきた。冒頭でも述べたように羞恥心は非常に身近な感情でありながら，学校での羞恥心に焦点を当てている研究は決して多いとは言えない。数少ない教育の分野における羞恥心に関する研究にはどのようなものがあるのかを概観する。

まず，羞恥心のポジティブな側面，すなわち道徳規範に準じて生じるネガティブな行動を抑制する羞恥感情に焦点を当てたものを紹介する。松井・中村・堀内・石井(2006)は，行為や状態に対する「恥ずかしい」という意識を意味する恥意識が青少年の問題行動を抑制する要因としてみなし，日本とトルコの中高生を対象にした2004年の調査を基に，恥意識と非行許容性の分析を行った。トルコでは，非行許容性は道徳意識によって説明され，恥とは関係がないが，日本では非行許容性が他律的恥意識によって説明され，恥意識が非行許容性を抑止する機能があることが示唆された。ただし，仲間と同調するような他者同調的恥意識では抑止機能を持たないことも同時に明らかになっている。このように，従来から羞恥心が道徳的に働くと考えられている日本においては，恥の経験によって非行を抑止しようという議論がなされている。飛田(2005)も，しつけの中で特定の行動が恥ずかしいことを理解させることで社会的規範を身に付

けさせる必要性を述べている。

しかし，すでに述べてきたよう羞恥心は非常に多様であることがこの分野における懸念点として存在する。問題行動の抑制につながる恥意識がある一方で，攻撃性や自尊感情の低減につながる恥意識もある。羞恥心をモラル教育に用いるためには，この羞恥心の多様性に配慮する必要がある。

次に，羞恥心のネガティブな側面に焦点を当てた研究を紹介する。

宮道・藤生(2018)は，中学生の学校ストレス感受性に影響を与えるネガティブ感情に関する出来事を収集し，分類した。宮道・藤生(2018)は「恥ずかしさ・緊張」をネガティブ感情の 1 つの例として挙げ，このような感情と相関の高い学校ストレス感受性に影響を及ぼす学校場面を抽出したところ，人前で発表する場面や失敗場面が挙げられた。学校生活で頻繁に訪れる人前で発表する場面や，避けて通ることのできない失敗場面における羞恥心が，子どもの精神的健康に悪影響を与える可能性が示唆されている。

また，大学生を対象とした研究ではあるが，質問・発言場面における羞恥心と，その感情への対処行動の関連を調べた研究として川崎(2008)が挙げられる。川崎(2008)は，羞恥感情，特に自らの劣位性が公衆の面前で露呈する公恥を喚起する場面の想定を求めた上で，樋口(2004)の示した羞恥心への対処行動 11 種それぞれの実行可能性を尋ねた。また，質問・発言場面に関しては，「講義中わからないことがあったら教員に質問にいく」「演習や実習でうまくできないことは先生に相談する」「講義時間でのミーティングは自分の考えを言う」「講義の中で集団で作業をするときには積極的に活動する」「授業で発言が求められる場面では自分の意見を言う」「授業の話が分からなかったときに，友達にそのことを聞く」の 6 つの項目を用意し，「まったくしない(1)」から「ほとんどいつもする(5)」までの 5 件法で回答を求めた。結果を分析したところ，羞恥喚起場面で弁解や攻撃，逃走，無視，正当化といった対処を行う第 1 因子と，事実の報告，内的状況の報告，ユーモア，謝罪，修復といった対処を行う第 2 因子に分類された。川崎(2008)は第 1 因子を「防衛的対処」，第 2 因子を「受容的対処」と名付け，前者のような対処をとる人ほど質問・発言行動が少なく，逆に後者のような対処行動をとる人ほど質問・発言行動が多くなることを明らかにした。この研究は，ネガティブ感情である羞恥心に対する対処の仕方が，授業効果を高める質問・発言行動の発現に関わっていることを示唆している。しかし，この研究の対象は大学生であるため，そのまま自己概念の形成途中の中学生・高校生に当てはまるかは疑問である。更なる検討が必要であると考えられる。

以上，教育場面における羞恥心に関する研究の分野を取り上げた。

今後の展望

本稿では，羞恥心に関する先行研究をまとめてきた。最後に，今後の教育分野における羞恥心研究の展望を考察する。

羞恥心は誰も頻繁に経験する感情であるが，その感情によってもたらされる効果に意識的であることは非常に少ない。また，既に述べてきたように，羞恥心はそれが発生する状況をとっても，下位感情をとっても，対処行動をとっても，非常に多様であり，一概に良し悪しを判断できるものでもない。羞恥心研究を今後学校分野で行っていくうえで，どのような羞恥心に焦点を当てるのか，ということはまず初めに検討されなくてはならない項目である。

学校教育場面における羞恥心研究の蓄積は少ない。羞恥心が生じる場面に関する検討は存在するが，十分に検討されているとは言い難い。また，その要因や対処行動，更には羞恥心のネガティブな側面の克服の検討も十分とは言い難い。昨今の学校教育では，自らの意見をアウトプットすることを求められたり，正解の存在しない問いに対して試行錯誤をして解決に向かっていったりする子どもの育成が求められている。このような子どもの育成のために，その行動を妨げる要因としての羞恥心に適切に対処し，克

服する手立てを提供しうる研究が今後望まれる。

また，その多様性に注意しながらも，羞恥心がときに向社会的な行動を招く可能性がある事にも十分留意するべきである。学校教育場面における羞恥心研究の蓄積が少ないからこそ，羞恥心をネガティブなものという一側面から見るのではなく，ポジティブな面も含め，子どもたちはどのような羞恥心を感じているのかを検討する必要がある。

引用・参考文献

有光興記 (2001). 罪悪感･羞恥心と性格特性の関係，性格心理学研究，*9*(2)，71-86.

有光興記 (2015). 自己意識的感情の経験的定義の言語間比較，感情心理学研究，*22*(2)，53-59.

薊理津子 (2008). 恥と罪悪感の研究動向，感情心理学研究，*16*，49-64.

Benedict, R. (1946). *The Chrysanthemum and The Sword*. Boston: Houghton Mifflin Co. (ベネディクト，R. 長谷川松治 訳(1967). 定訳 菊と刀 日本文化の型 社会思想社)

Buss, A. H. (1980). *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: Freeman.

Edelmann, R. J. (1985). Social embarrassment: An analysis of the process. *Journal of Social and Personal Relationships*, *2*, 195-213.

Fischwe, K. W., & Tangney, J. P. (Eds) (1995). *Self-conscious emotion: The psychology of shame, guilt, embarrassment, and pride*. NY: The Guilford Press.

Haidt, J. (2003). The moral emotions, In R. J. Davidson, K. R. Scherer, & H. H. Goldsmith (Eds), Handbook of affective sciences. Oxford; Oxford University Press, 852-870.

Harter, S. (2006). The self. In W. Damon (Editor-in-Chief), R. M. Lerner (Editor-in-Chief), & N. Eisenberg (Vol. Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 3. Social, emotional and personality development* (6th ed., 505-570). NY: Wiley.

橋本恵似子･清水哲郎 (1981). 羞恥感情の研究 (2) 羞恥感情構造の因子分析，聖母女学院短期大学研究紀要，*17*，55-60.

樋口匡貴 (2000). 恥の構造に関する研究，社会心理学研究，*16*(2)，103-113.

樋口匡貴 (2002). 恥の発生状況と恥の下位情緒との関連，松山東雲女子大学人文学部人間心理学科紀要「人間心理」，*3*，35-45.

樋口匡貴 (2004). *恥の発生―対処行動に関する社会心理学的研究―* 北大路書房

樋口匡貴 (2009). 恥―その多様な感情の発生から対処まで 有光興記・菊池章夫(編) *自己意識的感情の心理学* 北大路書房 126-141.

Higuchi, M. & Fukada, H. (2002). A comparison of four causal factors of embarrassment in public and private situations. *The Journal of Psychology*, *136*, 399-406.

Higuchi, M. & Fukada, H. (2008). Comparison of four factors related to embarrassment in nontypical situations. *Psychological Reports*, *102*, 328-334.

川崎直樹 (2008). 大学生の質問･発言行動と恥への対処行動との関連，人間福祉研究，*11*，149-157.

久崎孝浩 (2002). 恥および罪悪感とは何か―その定義，機能，発達とは―，九州大学心理学研究，*3*，69-76.

菊池章夫 (2003). TOSCA-3 (短縮版)，岩手県立大学社会福祉学部紀要，*5*，35-40.

菊池章夫･有光興記 (2006). 新しい自己意識的感情尺度の開発，パーソナリティ研究，*14*，137-148.

Lagattuta, K. H., & Wellman, H. M. (2002). Differences in early parent-child conversations about negative versus positive emotions: Implications for the development of psychological understanding. *Developmental Psychology*, *38*, 564-580.

Lewis, H. B. (1971). Shame and guilt in

neurosis, Madison. CT: International Universities Press.

Lewis, M. (1992). *Shame: The exposed self*, NY: Free Press. (高橋惠子監訳　遠藤利彦・上淵寿・坂上裕子訳(1997). 恥の心理学：傷つく自己　ミネルヴァ書房)

松井洋・中村真・堀内勝夫・石井隆之 (2006). 「子ども」―比較文化研究からみた日本の子ども―, 川村学園女子大学研究紀要, *17*(1), 51-70.

Miller, R. S. (1996). *Embarrassment: Poise and peril in everyday life*. NY: The Guilford Press.

宮道力･藤生英行 (2018). 中学生のネガティブ感情に関連する学校ストレス感受性項目の収集と分類, 岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要, *3*, 17-30.

水野修次郎 (1998). 日本人米国留学生における原因帰属, 罪, 恥と学習適応との関係, カウンセリング研究, *31*, 31-42.

成田健一・寺崎正治・新浜邦夫 (1990). 羞恥感情を引き起こす状況の構造:多変量解析を 用いて, 人文論究, *40*, 73-92.

小川時洋 (2015). なぜ概念･定義が問題となるのか, 感情心理学研究, *22(2)*, 83-88.

岡田顕宏 (2003). 日本人大学生の恥および罪悪感傾向の測定―TOSCA-A 日本語版作成の試み―, 札幌国際大学紀要, *34*, 31-42.

菅原健介 (1992). 対人不安の類型に関する研究, 社会心理学研究, *71*, 19-28.

菅原健介 (1998). *人はなぜ恥ずかしがるのか* サイエンス社

菅原健介 (2005). *羞恥心はどこへ消えた？* 光文社

Tangney, J. P., Wagner, P. E., & Gramzow, R. (1989). *The Test of Self-Conscious Affect (TOSCA)*. Fairfax (VA): George Mason University.

Tangney, J. P. (1991). Moral affect: The good, the bad, and the ugly, *Journal of Personality and Social Psychology*. *61*, 598-607.

Tangney, J. P. (1993). Shame and guilt, In C. G. Costello (Ed.), Symptoms of depression. New York: Wiley, 161-180.

Tangney, J. P. (1995). Recent advances in the empirical study of shame and guilt. *The American Behavioral Scientist*, *38(8)*, 1132-1145.

Tangney, J. P., Dearing, R. L., Wagner, P. E., & Gramzow, R. (2000). *Test of Self-Conscious Affect-3*. Fairfax (VA): George Mason University.

Tangney, J. P., & Dearing, R. L. (2002). *Shame and Guilt*. NY: The Guilford Press.

Tracy, J. L., & Robins, R. W. (2004). Putting the self into self-conscious emotions: A theoretical model. *Psychological Inquiry*, *15*, 103-125.

Tracy, J. L., & Robins, R. W. (2006). Appraisal antecedents of shame and guilt: Support for a theoretical model. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *32*, 1339-1351.

Review and Perspectives of the Research on Embarrassment in School Education

Chihiro SUZUKI
Ichiko SHOJI

The purpose of this study was to summarize previous research on the definition, factors, development, and measures of *embarrassment*, and to explore the possibility of conducting psychological research regarding embarrassment among students in school settings.

First, the following basic information was organized: the definition of embarrassment, situations in which people tend to be embarrassed, factors that cause people to develop the feeling of embarrassment, and culture associated with embarrassment. In this study, embarrassment was defined as "an emotional response to the awareness of unintended or unwanted pain or deviance" (Higuchi, 2000).

The next section summarizes previous research on the development of embarrassment.

Third, previous studies on problems posed by embarrassment were reviewed. For example, a sense of shame, a stronger feeling of embarrassment, is a painful emotion compared to a sense of guilt which leads to maladaptive behaviors. The "wall of embarrassment" (Sugawara, 2005) prevents people from doing what they should do to avoid a temporary loss of a positive reputation.

Fourth, the following three measures were introduced: a) a scale that measures situations in which embarrassment occurs; b) a scale that measures specific feelings of embarrassment in a particular situation; and c) a scale that measures whether embarrassment occurs in a presented scenario.

Finally, after reviewing previous studies on embarrassment in the field of education, the outlook for future research was summarized. Although embarrassment tends to be overlooked as it is a common emotion, it may interfere with children's mental health (children's healthy development of emotional well-being) and lead them to exhibit maladaptive behaviors. On the other hand, having a sense of embarrassment may help students exhibit normative "well-adjusted" behaviors. These contradicting findings confirm the significance of continuing the research on embarrassment. In addition, embarrassment in adolescents should be focused on studies further as this developmental phase in a perspective of embarrassment has been scarcely researched yet.